

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第二十九章

kidnap & extortion

— 誘拐と恐喝 —



峯村 明

目次

kid nap & extortion	
お願い	2
登場人物	3
kid nap & extortion	5
あとがき	17
奥付	18

kid nap & extortion

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。
(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年08月10日記

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
ひろ	健の妻
真	健・ひろ夫妻の子
イリチャ	真の魂体
A.パウジーニ	桧山 健の個人秘書

cast29.JPG

kid nap & extortion

283.

いきなり名を呼ばれて、イリチャはびっくりして飛び上がった。《な、なに？》

「どこにいるのかと聞いてるんだ！！」

《え、健のオフィス》

「——そんなところでなにしてるんだ」

《忘れ物取りに来たんだよ》

「忘れ物？　まあいい、それどころじゃない、おまえすぐアルチニアのところへ戻れ！」

《——どうしたの、忘れ物？》

「だれかがあの場所を知っている。すぐに行ってくれ、そうだバランケを連れて行け、なにかの役に立つかもしれん」

《わかった。けど、どうしてわかったの、ちょっとあなたの記憶探らせてもらおうよ…… うわー…… しゅらばじゃん》

「うるさいっ！！！　早くいけっ！！！」

284.

芸術部門の夏季ワークショップ七日目。参加者たちが集合する前に、サーディク先生は会場となるスタジオの点検に来た。城の三階にあるその部屋は、半地下にある小劇場

とエレベーターで直結していて、リハーサルや練習に使われる。清掃状態や空調具合をたしかめつつ、ふと高窓の外が気になったサーディク先生である。

辺りを見回して椅子を見つけ、窓際に運んで靴を脱いでよっこらしょとよじ登る。そこで意外なモノを見つけ、錠を外して窓を開けた。

「そんなところで何をしてるんだ？」

壁を通りぬけて外へ出たところでいきなり声をかけられた翼竜はびっくりして口ばしにくわえていた物を落っこししかけ、声をかけてきた相手をにらんだ。

それからくわえていた物を、ふいっと宙に放り、言った。「ちょっと急いでるんだ、またあとでね」言い終えると放った物を再びくわえ直し、飛び立とうと体に力を溜めたかと思うと、すうっと空中に消えてしまった。

「なにを急いでるんだろう」サーディク先生は独り言ちた。「アイスクリームくらい、ゆっくり食べればいいのに」

「アレは」突然、となりで声がした。見ればワークショップ参加者のひとり、男子生徒が先生と同じように椅子の上に乗って、目いっぱい背伸びして窓から外をみていた。この子は翼竜を見てしまったのかと先生は身構えた。生徒は先生を見返し、したり顔でうなずいた。「アレはハーゲンダッツのアイスバー、イチゴミルク味」

285.

「今、アルチニア、って言わなかった？」

憑き物が落ちたようなひろを、健は振り返った。イリチャとの会話は想念だけでできるが、思わず声に出してしまったのだった。

「あたし、そういう名前のお友達がいたわ」

「いた？ 過去形？」

「マミヤだったときにね、よくおしゃべりしたわ、仕事場は男の人ばかりで女の人がす

ごく少ないんだって言って、あたしが行くにとっても喜んでくれた。お邪魔じゃありませんかって訊くと、ぜんぜん、って。『いつ来てくれてもいいのよ、マミヤが持ってきてくれるお菓子はとてもおいしいわ、大歓迎よ』アルチニアさんは『化学者の館』のナンバーツーで…」

ひろは夢見るような表情で記憶を追っている。

「おまえ、『化学者の館』のアルチニアと知り合いだったのか！！　ちなみにオレはネウトラ評議会のナンバーツーだ！（※）」

「——そのアルチニアさんなの？　あのひとがどうかしたの？」

「じつはかくかくしかじか——」　ここでようやくペイリーの名が出てきた。どういうわけかすっかり忘れていたのだ。

「そ、そんなことが！？」　マックス・ペイリーのことはひろもよく知っている。夫がお金を貸している友人として。そんな人がトラブルに遭ったとなれば……　松山家の財産にとって……　由々しいことだ。思わず身を乗り出してくるひろを見て、健は尋ねた。

「おい……　真は……？」

「……え？」

「今……　いっしょに帰ってきて……　いっしょに玄関を入った……　さっきまでここにいた……」

健はさっきまで真がいた、自分の右側を手で示した……　なにもない空間を。

真は怒り狂った母親の剣幕にびっくりしてそっと玄関を出て行ったのだが、誰もそれに気がつかなかった。

「え……　じゃあ、うちの中？　お部屋かしら??」

健は玄関のドアを開け廊下を見渡して——　ぎょっとした。ごくっとのどをならし、「ひろ！」と呼んだ。

「うちの中を、よく探してくれ、いいな頼んだぞ！」　強く念を押し、すばやく外へ出て、ドアを閉める。

廊下の向こうに落ちているのは——　真が抱えていた花束に間違いはない。近くへ行ってみると、束ねた花はなかばひしゃげて、ラッピングは引きちぎられたように破れていた。あたりに花びらが点々とちらばっている。

それはまるでネコにつかまった小鳥が暴れて羽を散らした、とでもいうような、どこか生々しいものを感じさせる光景で、健はその場で立ちすくんだ。

廊下の角から現れたパウジーニを見るともなく見ると、彼は数本の、花がちぎれたバラを手をしていた。廊下はパウジーニが曲がってきた角まで、片側は高い窓、片側は壁、扉の類はない。

花束をもっていた真はどこへ行ってしまったのか。

（※）ウソです

286.

十分か五分か、もっと短かったかもしれない、ほんのわずかなうちに真がいなくなってしまった。

パウジーニは保安カメラの記録を見に警備室へ走り、健は自分のオフィスへ走った。秘書室をのぞいてみると出勤している者たちはのんびりと休憩の談笑をしていた。オフィスはロックされていて中にはもちろん、誰もいない。もっとも、ついさっきイリチャが、昨日パウジーニからもらったのに健が取り上げて冷凍庫にしまい込んだ、イチゴミルク味のアイスバーをこっそり取り返しにきたことは除いて。

気持ちの悪い汗が背中を伝わる。建物の外へ出たのかもしれないが、それならば保安カメラがとらえているはずだ。

うちにおいてきたひろのことがふと気になって自分の携帯電話を取り出す。するとむこうからかかってきた。

「……健!？」ひろの声はふるえていて聞き取りにくかった。

「帰ってきて!　お願い!」

「ああ、すぐ帰る。どうした、なにかあったのか?」たずねながら、真はうちにもいないのだ、と確信していた。

「電話が……電話がかかってくるの、うちの固定電話に」

「……誰から?」

「無言電話なのよ——!　もう三回も——!」

「……………」

「お願い、健！ 帰ってきて！ へんだわ、なんかへんよ——！！」

「電話が鳴ってもほうっておけ！」

「……でも……真かもしれないわ……」

すぐに帰るから、と言って桧山は電話を切った。ひろはどうかしている。いつものひろじゃない。

建物の中を帰宅途中に誰かに声をかけられたが、適当に手で挨拶してそちらを見もしなかった。妻の失調といい、息子の失踪といい、うちの家族になにか起きているんだ？ 桧山健ともあろう者が、思考が停止してしまって頭がまったく動かない。彼自身、既にどうかしていた。

287.

廊下に散乱したままだった花を、健は自分でかき集めて自宅へ戻った。玄関をあけて入ったエントランスがあまりに暗い。陽射しが入ってくるはずの窓に遮光カーテンが引かれていて、ひろは電話機をじっとみつめた姿勢でソファに腰掛けていた。

「ひろ……？」 そっと声をかけ、そっと肩に手をおくと彼女ははっと飛び上がった。

「……ああ」

「どうしたんだ、こんなに暗くして。カーテン開けてもいいか？」

「やめて！」

「……どうして？」

「カラスがいるの、テラスにカラスがいるの、大きなのが——！ 気味がわるい——！」

「ひろ」

「……………」

「気味がわるいのなら、オレが追い払ってやる。だからカーテン開けよう」

静かにそういう彼をひろは見あげ、ややあって小さくうなずいた。健がカーテンに手をかけたとき電話が鳴り出した。ひろはびくっとふるえ、頭をめぐらして助けを請うように彼をみた。彼はちらっと振り返り、カーテンをしっかりと開き、タッセルで留めつけ、それから電話機の前に立った。テラスに大きなカラスはいなかった。

コール音を十回数えてからおもむろに受話器を取る。

もしもし……と、向こうで息をのむ気配がした。

「——パパ?」「真!?!」「——パパ!」「真! 　どこから電話してるんだ、どこかで迷子になったのか?」「パパ! 　ぼくね——!」

真の声は口を塞がれたように途切れた。替わって……

ウフフフフフ……………

奇妙に明るく、

フフフフフフ……

陰鬱な笑い声。

「フフフフフ……やあ、これは失敬……フフフ……嬉しくてねえ……やっと気がついてくれた」

「貴様——まさか——」

健は口をつぐんだ。その名を口にするのもおぞましい。

「おお、その『まさか』さ! 　覚えていてくれたんだねえ、ま、ワタシは知る人ぞ知る有名人だからね」

「本当に、貴様か!?!」

健はヒューダーの記憶を辿る。

＊

アンベレオ王国・レガリオ王を迎えた総督府、シパド総督は死神ベネトナシュに憑依された姿で現れた。マミヤの遺骸を守ったヒューダーは力尽きてシパドの前に引き出され、既にとらわれていたダーヴェと共に心臓をえぐられたのだった。

人間ヒューダーとしての記憶はそこで終わる。が、魂体となった彼の存在は続く。彼は見ていた。マミヤの遺骸を抱えたイリチヤがその遺骸をヒューダーの傍らに横たえ、『火』となるのを。怒りと悲しみの冷たい炎がメッサナ全土を、いや、世界を覆い、あらゆるものを焼こうとしていた。

＊

ヒューダーの記憶を追いながら、健は電話機本体の設定パネルを開け、通話を録音するよう操作するという、ひどく現実的なことをしている。

「あの炎を、貴様は生き延びたというのか」

死神は指先に受話器から延びているコードを巻きつけて弄んでいる。えらく年代物の、骨董品のような黒い電話器。

「そういうことだね。キミらはこの時代においてあの時とは違う肉体をもっている。転生っていの？ でもワタシはあのときのままさ。なにしろ、ワタシは『不滅の神』だからね」

「不滅の神とは。恐れ入ったな」

とにかく話を長引かせるのだ。真はこの電話の向こうにいる。それがどこなのかつきとめられるなら……それには応援が必要だった。

しかしパウジーニを初め、いったい誰に死神の相手がつとまるというのか——！

288.

ひろはそろそろと立ち上がっていた。五歳の息子がただならぬ事態に巻き込まれたとわかってきて、顔色が……顔つきも……かわっている。彼女の『話を聴かせて！』という手振りを桧山は了解し、相手の声が聞こえるように機械を操作した。

「まあどうでもいいじゃない、そんなこと。それよりヒヤマくん、キミ、自分の息子の心配した方がいいんじゃないの？」

ひろが切羽詰った面持ちで、『電話を代わって！！』と手振りする。健は目で彼女の目をとらえ、口の動きだけで『落ち着いて』と言った。それから頭を少し傾けて『座って』と合図した。彼女が不承不承ソファに戻ると、彼は唇の片方をちょっともちあげて笑っ

てみせた。

「貴様がオレの息子になんの用だ!？」

「うん、まあこの子に用はないんだ。……ちょっとおどろいたね、キミの息子にしてはおどろくほど、とくべつなところがない、こんなごくふつうの子でも、キミにとっては大変な宝物らしい。キミの、いわばウィークポイントのひとつだ。

もうひとつは……キミのおくさんだね。彼女、どういうわけか、靈感がやたら強くてねえ、どうしても近寄れなかった。うっかり近寄ろうものならこっちを見られちゃうからね。彼女、息子が目の届かないところにいても、いつもつながっている感じで……こわいねえ、母親って。……息子は常に彼女に見張られていた」

死神のイヤらしい言い方にひろはむらっと気色ばみ、健は首を振って、乗るな、とサインを送る。

「だから彼女を突破すれば、息子の方はかんたんだった。実際そうだったね。

ああ、どうやって彼女を落としたか、知りたいよね？　ちょっとした魔法をかけたのさ、『キミには少しばかり、魅力が足りない、かもしれないなあ』ってね」

ひろはぼっと立ち上がった。そうだった、思い返せば、『おまえには少し魅力が足りない』などと、夫が口にしたこともそぶりをみせたことも、一度もなかったのだ。他人に中学生に間違えられたのは事実だが、彼は「日本の女子中学生は世界中でいちばんかわいいんだぞ」とかなんとか意味不明のフォローで慰めてくれたではないか。

彼女が持っていた小さな劣等感の種が死神の魔法でいっきに花開いて——
とんでもない誤解を——

死神は気楽な声音でさらにのんびりとつけ加えていた。「あれだよ、事実が三割、憶測、空想、思い込みで七割、物事は誤解と曲解で成り立ってるのさー」と。

くやしさと後悔のあまり、ひろの目はくらんだ。憶測と空想と思い込みで、息子の前で彼の父親を「最低!!」と罵ってしまったのだ。

（——だけど）ひろはおもむろに携帯電話を取り出す。先刻投げつけたやつだ。

（それはそれとして……じゃあ、これはなんなのよ！？）

例のシーンの画面を開いて……みようとして……えっ、となる。画像がない。正弘からのメール自体がない。自分で削除した覚えはない。劣等感に自分自身を見失ったひろにとっては不愉快きわまりない画像だったが。

怒り心頭に発しながらも、いつだったか『敏腕弁護士ウィンディ』が「不義の決定的証拠、なるものはとっとかなきゃだめよーあとで慰謝料ふんだくるのに要るのよ、そういうの」と……ひろに聞こえるように……だれかと話していたのを、ムカつきながら思い出したのだ。だから自分でもみ消すわけがない。

（……つくりもの……だったというの??）

だが夫は「アルチニアと会った」と言った。「全部話す」と。ワケがわからなくなってきた。息子は死神にさらわれてしまったし。

（いったいなにが！ どうなっているの！？）

ひろは両手を握り締めて激しく頭をふり、じたばたと足踏みした。

健は死神の語りを一語ももらすまいと神経を集中していた。なにか書くものはないかとあたりを見回し、床に放りだされた真のバースデーカードを拾ってくる。テーブルの上で裏返し、ペンを取り出してメモを取り始める。心を込めた力作をメモ帳がわりにされたら知ったら真は怒るだろうが、その時は……謝ればいい。

死神はさっき妙なことを言った。『靈感の強い人間に近寄ると、見られてしまう』。

ということは、そういった力のない人間には、見えない。彼は物質の肉体を持っていないということだ。

H&L財団本部として使われているこの城は、電子機器によるセキュリティシステムのほかにもうひとつ、別の方法で防御されている。城の持ち主、ラウレンス氏が強力な結界をかぶせてあるのだ。このふたつは複雑に絡み合っていて強盗のほかに目に見えないものの侵入を防いでいる。

ラウレンス氏はそういった「非物質的、侵攻を既に予測していたのだ。

しかしそれならば、「ごくふつうの子どもにすぎない、真を、どうやってさらったのだろう？

死神は相手が必死に耳を傾けているのを知ってか知らずか、語り続けている。

「息子を返して欲しいければ、ワタシの言うことをよく、聴いてほしいな。さもないければ、いやいや.....この子は生きたまま返してあげたいんだよねえ.....」

健はペンを紙に押しつけたまま電話機を見、立ってじたばたしていたひろを見上げた。彼女も両手を握り締めたまま凍りついていた。そして悲鳴をあげ、電話機に飛びかかろうとした。飛びかかって、死神の身代わりに電話機を殴りつけるか投げ飛ばすかしようとした。

健はとっさに立ち上がってひろの怒りを電話機の身代わりに受け止めた。死神との通信手段を切るわけにいかない。ひろは身を震わせてなにか叫び、健は彼女の頭を抱え込んで自分の胸に押し当てた。

290.

「おやおや！ おくさん、そこにいたの！ これは——しつれい」

死神の慇懃な、ゆっくりした物言いは、神経をひどく逆なでした。そこにいたのものにもない、ふたりともそこにいると知ってて言ったのだ。口を封じられてしまったひろは健の腕からのがれようともがき、握りこぶしで彼の胸をたたいてひとしきり暴れ.....声を押し殺して嗚咽した。健はひろを押さえ込んだ不自由な体勢からテーブルの画用紙を取り上げ、彼女に見るよう、促した。ひろがなで『おたんじょうびおめでとう』と書かれたカード。とたんにひろはそれに飛びついて抱きしめ、ソファにすわりこんで泣き崩れる。

ひろは過去にもこういった心理攻撃を受けたことがあったはずだ、と健はふと考える。彼女が高校三年生のときのインターハイ、目に見えない魔物の干渉から彼女を守るために心身をすり減らしていた間宮宮司の姿を、健は目の当たりにしている。魔物を退けたのは結局、ひろ本人だったのだが。

『人の弱みにつけ込んでくる、イヤなやつだ』と間宮宮司は魔物を評していたが、この死神のイヤらしさは、それ以上だ、と桧山は思う。何せ、死神の口にする多くの多くは事実なのだ。それは、単に事実である、それだけにすぎないが、吹き込まれた方はさまざまな感情を喚起させられる。単なる事実に着した感情の、それ自体の重みで人はひきずり落とされる。自分で落ちてしまう。

冥界に触れた人間に起きることと、まったく同じことが起きるのだ、と松山は直観する。

健は死神に向かって声を張った。「話をそらすな」と。「オレの息子と引き換えにしたいという、貴様の要求はいったいなんなのだ」

ちえっ、というような、なにやら残念そうな雰囲気が伝わってくる。面白いことを期待してたのに、ハズれた、というような。「キミが木石でできているとは知らなかったよ」となじるように言ってくる。

「オレが何でできているようが、貴様に関係ないだろう。要求は何だ、早くいえ」
 「あわてないあわてない。そう急かさないでおくれよ。でもそろそろいい頃合かな」
 （いい頃合……？）
 「キミ、覚えてるかな、冥界王さまのご子息のこと」
 「冥界王の？」
 「そ、冥界王さまのだいじなだいじな、ご子息のことさ」
 「冥界王の——息子——」

291.

『9かける3番目の王国』という物語がある。

王国の王が熱烈な恋をしてひとりの娘を后とした。だが、王に思いを寄せる女が后を中傷した。后が城の外で不貞を働いているという。それは根も葉もない作り話だったが、真に受けた王は后に幻滅して城から追い出してしまった。后ではなくなった娘はやがて男児を出産したが、王との婚姻をすら認めなかった神々の怒りを被り、母と子は引き裂かれた、という話である。それは冥界王誕生の出発点でもあった。

（ Salamander in the circle 第二十八章・9かける3番目の王国 ）

民族学者としてこの古い民話を知っていたヒューダーは、イリチヤが育ったという特殊な環境……黒曜石に満ちた水の中……は、母親から離された子が、破邪の水中で成長したことに符号すると考えたのだった。

ならば……イリチヤは冥界の王に落ちた男の、息子——

母子を裂いたのも、子を過酷な環境に置いたのも、神々の怒り、神々の意向。
そのこと自体が、イリチャが冥界の王に落ちた男の息子だということを裏付けている。

「それがワタシの要求だよ」

あとがき

今回の表紙は、旧第二十六章・kidnap の表紙の画像をもとに、ChatGPT の手を借りてブラッシュアップしたのを使いました。前のと似てるけど並べてみるとぜんぜんちがいますわ、AI 偉大なり～

この章の表紙第一案はイチゴアイスバーをくわえてる翼竜、第二案は黒電話。
第一案はファンタスティックすぎてテキストの内容と雰囲気の違いすぎるので没、第二案に決まりかけていたものの、重すぎて読者さまに引かれるんでないかい？ と心の声がささやく。結局、13 歳の真を引っ張り出すことに。
今後も旧作の表紙、使えるものは使いまわしたいと思っております。

2026 年 8 月 10 日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十九章 kid nap & extortion

2026 年 8 月 11 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 峯村 明 「Chat GPT」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

℥ Akira Minemura 2025-2026

著 者 峯村 明
イラスト 峯村 明
イラスト ChatGPT

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社